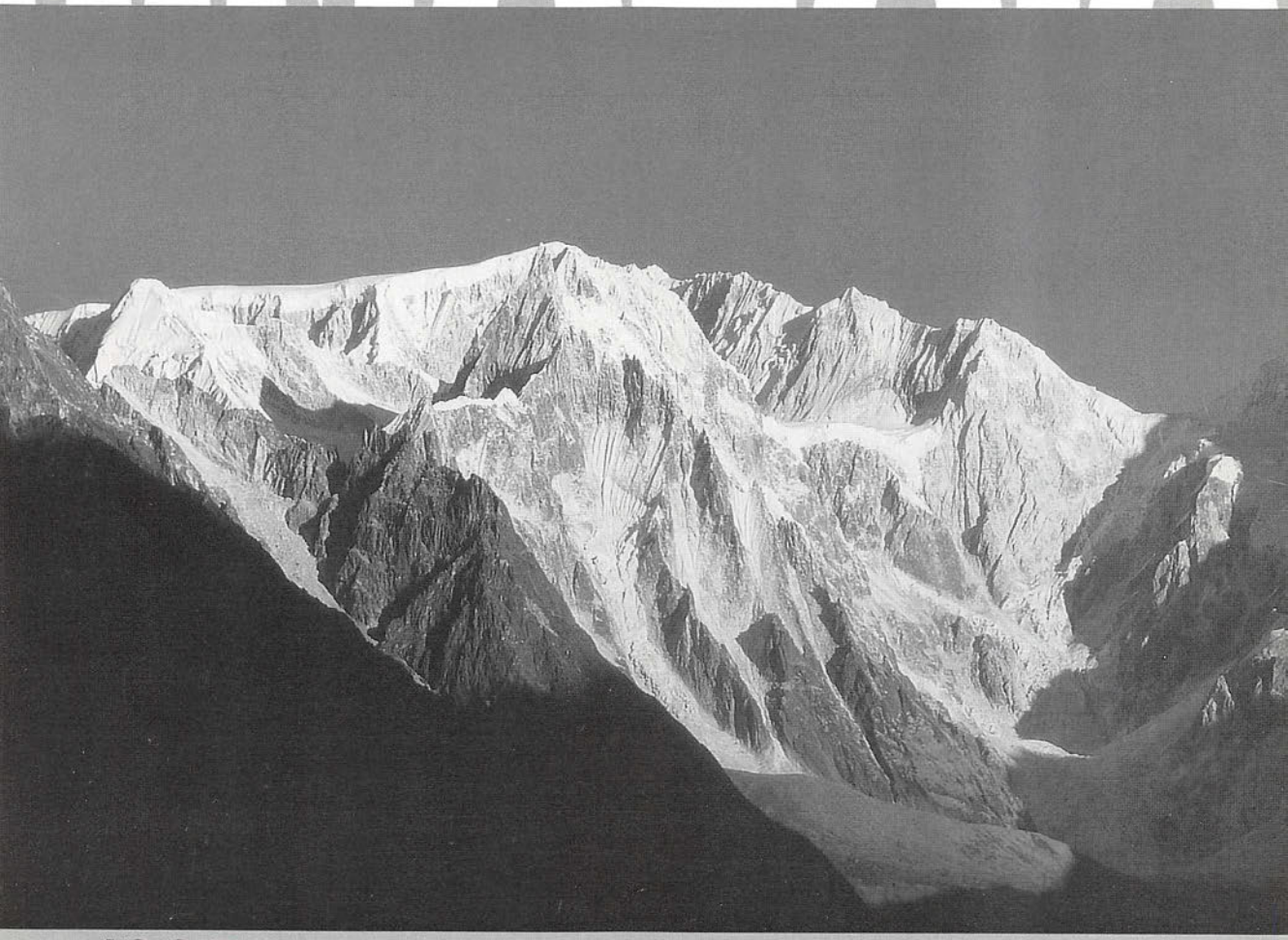
昭和51年5月9日第三種郵便物認可　平成7年4月1日発行（毎月一回1日発行）　ISSN 0385-5457

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 281



1995 APRIL

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN——HAJ

会費値上げと会員拡大のお願い

日本ヒマラヤ協会は、1967年に設立以来登山、踏査、探検・研究などをとおして、ヒマラヤの各地域に多くのメンバーを派遣し、得られた情報を公表することで「ヒマラヤ」を身近なものにするために果した貢献は誇り得るものであり、会員各位の御努力に深く敬意を表するものであります。

身近になったヒマラヤではありますが、事故対策はもとより時代の経過と共に新たな問題も起きて来ました。その大きなものに「環境問題」があります。地球規模で自然保護が叫ばれる中にあって、登山隊の物資やゴミ処理方法も随分と変ってきました。

我国で唯一のヒマラヤ専門団体として、ヒマラヤにおける活動の発展につとめてきた本会の業績は高く評価され、高所登山・環境問題・プラブーツなどの分野では、各団体から連携を求められる機会が多くなり、一定の役割を果して参りました。

本会がこのような役割を期待され、それに応えることが可能になったのは、1979年11月以降「事務局専従」体制を維持してきたことにあると云っても過言ではありません。

専従者の費用につきましては、その大部分を外部資金の導入などの努力によって賄なわれてきました。しかし、昨今の社会情勢から外部資金の導入も厳しくなったのが現実です。

このような中で昨年７月合同理事会・評議員会が開催され事務局体制（事務所の閉鎖・専従員の廃止等）について真剣に検討された結果、「日本ヒマラヤ登山界の中で、主体性を持った活動を続けることによって、結果的に公益性を実現していく組織として存続」することが決定され、新年からは専従員１名とすることとなりました。

ここに事務所を維持し、専従員を置き所期の目的を達成するために、1980年以来15年間据置いて参りました会費を「8,000円（1997年から10,000円）」に改訂させていただくことになりましたので、会員各位の御理解をお願いする次第です。

また、現状の会員数では専従員の費用を賄うことはできません。新しい会員の獲得とサマー・キャンプ参加者の増大などにつきまして会員一人一人の皆様の御協力をお願い致します。

表紙写真

昨秋、信州大学とネパール警察登山探検財団との合同隊が初登頂したギャジ・カン（7,038m）は色んな顔を持つ山である。マナスル西壁のＢＣ付近から眺望すると西面とは対称的な東面の全容が眺められる。

（田辺　治）

ヒマラヤ No.281

1．PEOPLE　ナリンダール・クマール

2．地上最美の山“プモ・リ”を登る
バーバリアン・クラブ、プモ・リ登山隊1994年

10．ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・インフォメーション〉

14．ナンガ・パルバットの山脈　岩崎　洋

18．中国登山15年小史　山森欣一

24．寸感・事務局日誌

PEOPLE

Col. N. KUMAR

世界のスキー指導者が集う「インタースキー」が、1月下旬に長野県野沢温泉で開催された。

インタースキーは、国際スキー教育連盟（ＩＶＳ）が主催し、プロの国際職業スキー教師連盟（ＩＳＩＡ）、アマチュアの国際スキー指導者連盟（ＩＶＳＩ）、学校体育部会（ＩＶＳＳ）の3部会で構成される国際会議で、1951からの歴史があり今回で15回を教える。日本での開催は1979年の山形・蔵王に次いで2度目。

インタースキーは、「スキーの万国博」と云われるだけあって、今回は35ケ国から1200人が参集した。

この各国を代表とするスキー教師や指導者たちがそれぞれの技術を見せ合うデモンストレーションをはじめ、実技を伴う研究会や講演会などで参加者が相互に刺激し合い、大会は盛り上がった。特にショー化されたデモンストレーションは、連日ゲレンデを訪れた観客を引き付けた。

このインタースキーにインドからも代表が参加した。元インド登山財団副総裁で現在インド冬季競技連盟会長のN. クマール氏である。

クマール氏より一足早く来日して、白馬でスキーの研修をされていたマナリ登山学校のスキーとパラグライダーのインストラクター、ローシャン・ラル・タクール氏とディッキー・ドルマさんも研修の合間を縫って野沢に駆けつけた。

ディッキー・ドルマさんは1993年の印ネ女子合同エベレスト登山隊に参加して女子最年少登頂者となった方である。

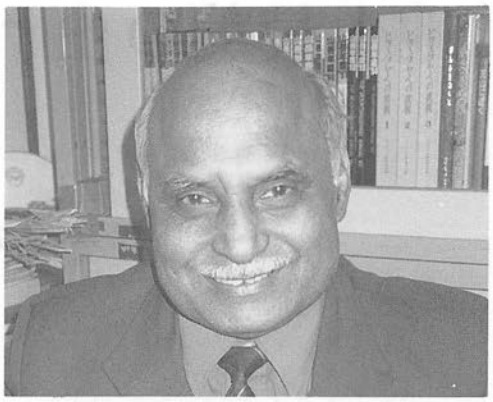
*

“ブル”のニックネームで親しまれるナリンダール・クマールさんは、今回で2度目の来日となった。最初の来日は1987年にＨＡＪがインド・ヒマラヤ会議のゲスト・スピーカーとして招請した時である。

氏の略歴は、「ヒマラヤ」186号でも紹介したが、新しい会員のためにもう一度述べておこう。

氏は1933年にラワルピンディーに生まれる。

1954年からインド陸軍に入り、スキー・スクー



ルの上級インストラクターなどを務める。

その後、1966年〜1970年にかけてダージリンのヒマラヤ登山学校の校長、1970年〜1976年はグルマルグのインド・スキー登山学校の校長、1977年〜1980年はグルマルグの陸軍高所山岳戦学校の校長などを歴任された。

登山歴としては、1958年のトリスル（7,120ｍ）にアーミー隊を率いたのを皮切りに、1960年はインド・エベレスト隊に参加して南峰直下の8,620ｍまで到達する。

1961年にはガルワールの怪峰、ニルカンタ（6,596ｍ）に隊長として挑み、初登頂に成功する。

1964年は、ガルワールの盟主、ナンダ・デビィ（7,816ｍ）に出掛けインド人初登頂を果たす。

1965年は「ナイン・オブ・ザ・トップ」のエベレスト大量登頂を果たしたインド隊の副隊長として参加。

1970年は、ブータンの聖なる山、チョモラーリ（7,314ｍ）に隊長で挑み登頂に成功する。

1977年は、シッキム側からカンチェンジュンガ（8,598ｍ）の北東支稜に挑み、カンチの第2登に成功する。

1981年には東部カラコルムのシア・カンリ（7,422ｍ）とサルトロ・カンリ（7,756ｍ）にヌブラ谷から挑み、以後シアチェン氷河流域の山はインド側からアプローチされるようになり、パキスタンからは恨まれている。

ナリンダール・クマール

地上最美の山“プモ・リ”を登る

バーバリアン・クラブ、プモ・リ登山隊1994年

はじめに

この登山計画はその頃はよく一緒に登っていた仲間とヒマラヤへ行こう！という事で始まったものだった。私はちょうど1991年のマカルー遠征が消化不良で終った事や、当時、会の代表の金子氏より自分で隊長をやって登山をやったらどうだ、という話もあり、私を中心に話は具体的になっていった。

当初のメンバーも時がたつにつれ入れ替わり、最終的には私の他に同じ会の小山良子、鈴木典仁、登研の田岡知明、チーム84の山口直之の５人のメンバーとなった。特にヌン（1992年）、ダウラギリ（1993年）と一緒だった山口の参加は心強かった。

目標としたプモ・リは東ネパールのクーンブ地方にあり、サガルマータやアマ・ダブラムなどと共に知名度の高い山である。

山容はプモ・リの意の乙女の山とは違い、男性的な三角錐の美しい形をしている。

アプローチはエヴェレスト街道と呼ばれる整備されたトレッキング・ルートを進む。

このような環境にある山なのですでに多くの隊に登られ記録的価値は全くない。

しかし、この美しい山を舞台に気心知れた仲間と登山を楽しみたい、と思いこの計画を始めた。

登山隊の概要

1. 目標の山
   山名　プモ・リ
   標高　7,161ｍ
   位置　東ネパール、クーンブ地方
2. 登山の結果
   10月22日に野沢井と山口の２名が登頂。
3. 登山期間
   1994年９月初旬～10月下旬（約50日間）
4. 各キャンプの高度
   ＢＣ　5,300ｍ
   Ｃ１　5,600ｍ
   Ｃ２　6,200ｍ
   Ｃ３　6,700ｍ
5. 隊の構成
   隊長　野沢井歩（30才）バーバリアン・クラブ
   隊員　小山良子（32才）　〃
   〃　鈴木典仁（27才）　〃
   〃　田岡知明（26才）山岳会登研
   〃　山口直之（26才）山岳同人チーム'84
   ポーター：往路ゾッキョ22頭、復路ヤク５頭
   リエゾンオフイサー：Ｉ．Ｒ．レギミー
   サーダー兼コック：ダワ・ラマ（31才）
   キッチンボーイ：バル・クマール（22才）
   メイルランナー：デビ・ラム（34才）
   キッチンヘルパー：ナワン・シェルパ（28才）

行動概要－カトマンズ～ＢＣ－

９月初旬、日本から、ヨーロッパから、パキスタンから、と各自バラバラにカトマンズへ集まった。

タメルの安宿ポロ・ゲストハウスに拠点を置き、登山の準備を進める。

今回装備は、私がマカルー、ダウラギリで使用したデポ品を使わせてもらい、若干足りない物をカトマンズで揃えた。

食糧は高所用のα米やポカリスウェットなどカトマンズで手に入らない物は日本より運び、あとは全て現地で調達した。

このように日本からは個装だけを持って、アナカン（別送品）をやらなかったので非常に楽で、しかも安くあげる事が出来た。

遠征をともにするネパール人スタッフはキッチン・ボーイ以外全て'93年ダウラギリからの付き合いなので気心知れた仲間だ。

クライミング・シェルパは雇わず、ＢＣより上は自分達でルート工作や荷上げをする計画なので、美味しい料理を作り、マネージメントも出来、しかも日本語堪能なダワはサーダー兼コックとして適任だった。

９月15日　ブリーフィングも終わり、隊荷も集まり出発するだけとなった。

16日　ルクラへ向けて出発。

ルクラまでの輸送は飛行機をチャーターする予定だったが、モンスーンでルクラの空港は修復中だったので使えず、ヘリコプターをチャーターすることになった。飛行機で2,000＄、ヘリで2,500＄だった。少しでも元を取るためにトレッカーや荷物を乗せることにした。

ヘリはＥＰＩボンベやO_2、ケロシンまでＯＫという事だったが、空港でケロシンがはじかれ、ルクラで８倍もするケロシンを買うはめになってしまった。

荷物満載のヘリに乗り込み50分のフライトでルクラへと着く。

▲チャーター・ヘリコプター

▼ペリチェ～ロブジェへ

キャラバンの準備をする。ゾッキョと呼ばれるヤクと牛の混血牛を使う。持ち主は'91マカルー時のサーダー、アン・ドルジェ氏だ。

私達はリエゾン・オフィサーとメイルのデビさんと共に順化トレーニングをしながらキャラバンを進めたが、他のシェルパと荷物は先にＢＣへ行ってもらった。

リエゾン・オフィサーに身の回り品を背負ってもらうつもりが拒否され、私達で背負うハメとなってしまった。

17日　ルクラ～パグディン

のんびりと半日ほど歩くと着いてしまった。パグディンの宿はダワのおじさんの経営で、親切にしてもらった。

18日　パグディン～ナムチェ・バザール

途中チェック・ポストを通り、ドウドゥ・コシの吊り橋を渡るとナムチェまで急登が続く。喘ぎ喘ぎ登りきるとシェルパ族の故郷ナムチェ・バザールに着いた。

カラフルなロッジが多い。一軒のドミトリーに落ちつく。ここのロッジはなんとダル・バードのお替わりが無い。非常に物足り無さを感じ、翌日別のロッジへ移る決心をする。リエゾン・オフィサーはしつこく米を炊かせ一人ダル・バードを食べていた。

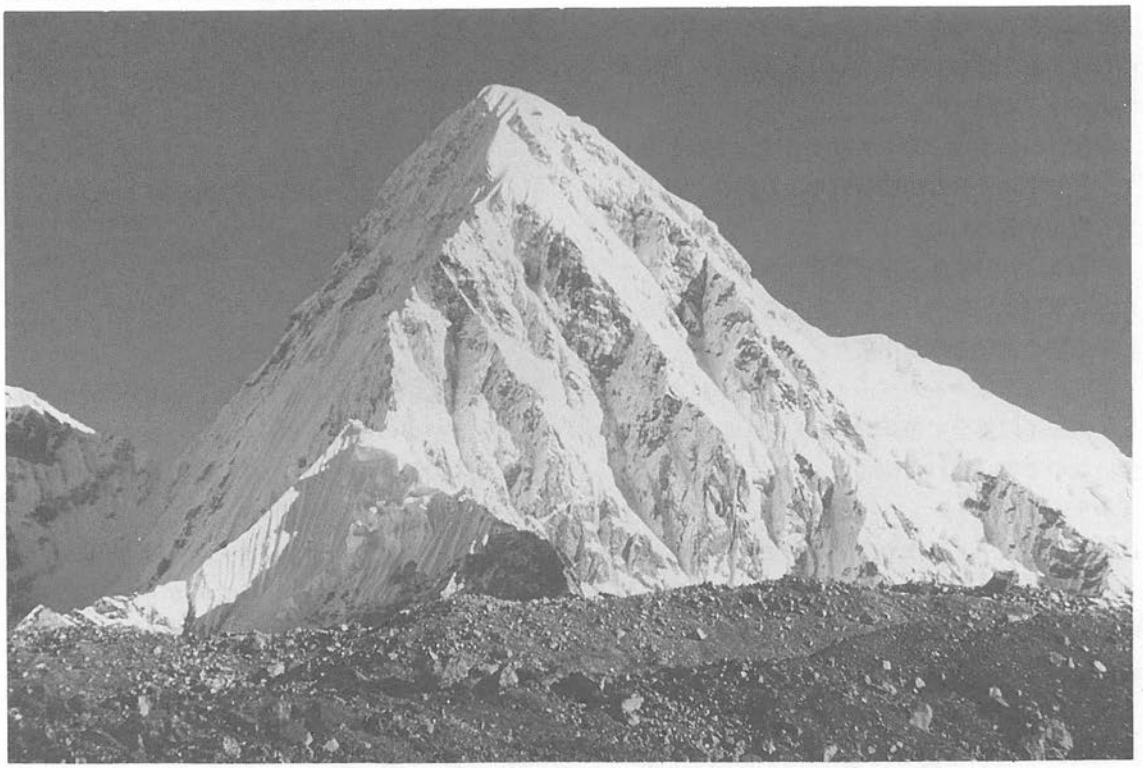
19日　ナムチェ・バザール

ここは3,400ｍなので一日スティする。各自自由行動。

私はＳ.Ｐ.Ｃ.Ｃで書類の手続きを行なう。これはクーンブ・エリアの環境保全のためにゴミ処理の供託金をする制度だ。

夕方シャンボチェ（3,800ｍ）まで登り順化ト

▼カラパタールの丘より眺めるプモ・リ



レーニングを行なう。

20日　ナムチェ・バザール〜タンボチェ

ゴンパのあるタンボチェは（3,800m）。ここに2泊し順化トレーニングを行なう。

夕刻、ガスの切れ目からアマ・ダブラム、ローツェ南壁が姿を現す。

21日　タンボチェ

朝、天気の悪くならないうちに4,200mまで登る。

午後はシェルパ、リエゾン・オフィサーを混じえてトランプ大会をやる。

21日　タンボチェ〜ペリチェ

ペリチェは4,200m。ここでしっかりと順化を行なっておきたいので3泊する。

22日、23日　ペリチェ

ポカルデ・ピークの支尾根を5,000mまで登る。途中なつかしいマカルーが望めた。

周辺に転がっている大岩でボルダーリングを楽しむ。

24日　ペリチェ〜ロブチェ

ヤクの放牧が行われている広いU字谷をロブチェに向けて進む。

トゥクラより苦しい登りで峠に着く。ここにはエヴェレストで遭難したシェルパ達の慰霊のケルンがある。そして前方にはこれから目指すプモ・リが顔を出す。想像以上に大きく、そして美しい山だ。

ロブチェ着。ロブチェ東峰の支尾根5,200mまで登り順化トレーニングを行なう。

ここで鈴木の調子が悪くなる。

25日　ロブチェ〜ＢＣ

朝、鈴木の調子が悪いのでペリチェへ下ってもらう。その後彼は別の病気も併発し帰国する事になってしまった。

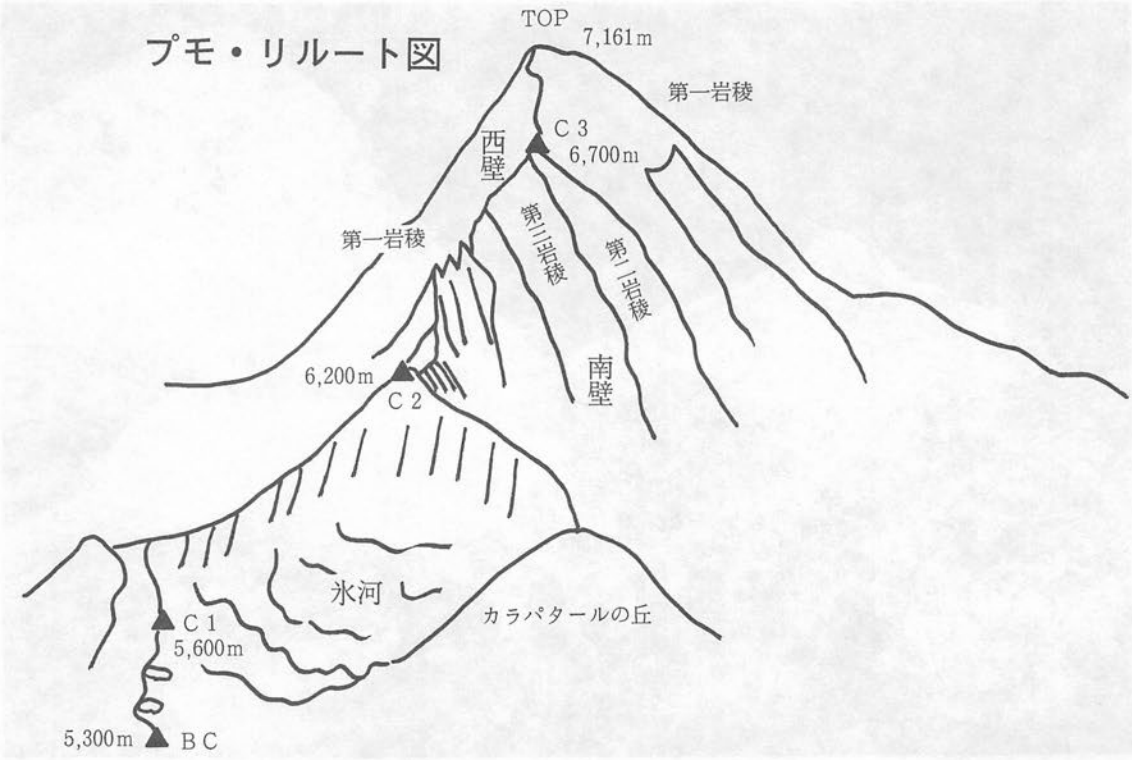
野沢井、山口、リエゾン・オフィサーでＢＣ入りし。小山、田岡は念のためＢＣを往復しロブチェにもう一泊してもらう。

ゴラクシェップで我々のＢＣが当初予定していたＢＣ（カラパタールの丘の東側）ではなく、なんと西側に作っている事を知った。

私はプモ・リＢＣは東側が当たり前と思っていて先発のサーダーと深く打ち合わせてなかったのが悔まれる・

とりあえず我々のＢＣへと行ってみる。そこは昔、池だった所で砂地の窪みとなっている。

又、トレッカー達もいないし他のプモ・リ隊も



いないので非常に静かで良い所だった。

さて問題はルートだ。過去にこちらから南稜へ取り付いているし、ルートを目で追うとなんとかなりそうだ。

各自個人用テントを設営し、ロブチェに戻るメンバーを見送る。

夜、コックにホット・チャンに玉子を入れた怪しい飲み物を飲まされる。

登山活動

9月27日　リエゾン・オフィサーは顔が腫れ熱もあるのでメイルを付けてペリチェへ下ってもらう。その後一旦ＢＣに戻ったが不調でカトマンズに帰った。

小山、田岡がＢＣ入り。

装備の点検を行なう。

28日　午前中、食糧をレーション化する。

午後よりＣ１までのルート偵察。

登山前にプジャでもと思ったが、メイル・ランナーとキッチン・ボーイはクリスチャンだったりしたのでやらなかった。

29日　我々のとったルートはＢＣより南稜から派生しているリッジに向かって氷河と岩稜のコンタクト・ラインにあるガレ場をつめる。

リッジの手前の平らな氷河にリレー・キャンプ（Ｃ１）を設ける。

２日間かけて全装備、食糧を荷上げする。この間、キッチン・スタッフが手伝ってくれたので助かった。

10月１日　レスト

２日、Ｃ１へ移動。不安定なガレ場の中の雪面を登り、リッジへ取りつく。

このリッジは南稜との頭まで美しいナイフ・リッジとなっている。フィックス・ロープを張りながら進むが、雪が非常に不安定だ。

３日、ナイフ・エッジ上にルートを伸ばし、南稜とのジャンクションの頭に出た。

ここにＣ２を作る。当初の予定のルートとはここで合流する。

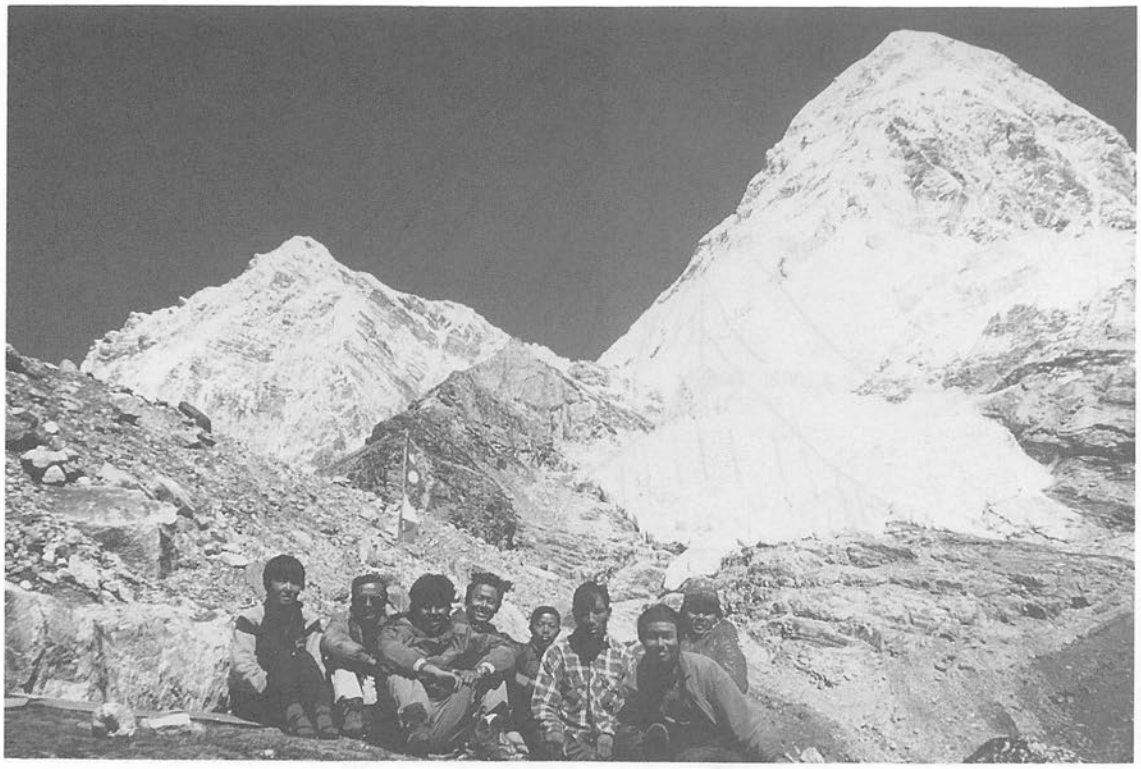
４日、不調の小山はＢＣに下ってもらい、野沢井、田岡、山口でＣ２へ荷上げ。ＢＣへ戻る。

５日、レスト。私は同ルートのオーストラリア隊へカラパタールの丘を越えて挨拶に行く。Ｃ２より同ルートとなるので協力を約束する。

ゴラクシェップへ行き、サーダーとビールを飲む。

６日、Ｃ２へ移動。夕刻、サガルマータが赤く

▼ＢＣでのひと時



燃えた。

７日、Ｃ２より140ｍほどナイフ・エッジを進むと第一岩峰に当たる。これを南壁側へ回り込んで登る。雪は非常に不安定で悪い。

８日、昨日の終了点よりさらに延ばす。

何んとかＣ３を作りたい。しかし、不安定な雪の状態でルートは延びない。果敢に山口がルートを伸ばすが6,450ｍのテラスで時間切れとなり、ＢＣへと下る。

９、10、11日　レスト

12日、なんとかＣ３を作りそのままアタックに持ち込みたい。Ｃ２へ移動。

13日、Ｃ２出発、前回の6,450ｍのテラスに個装やテントなどをデポし、さらに上へルートを延ばす。

ここから西壁側へ回り込む。しかし、相変らず不安定な雪壁でルートは仲々延びない。

夕方第三岩稜からのナイフ・エッジの6,600ｍに達したが、このままとてもアタック出来る状態でなく、6,450ｍに戻りビバーグする。

14日、ＢＣへ下る。

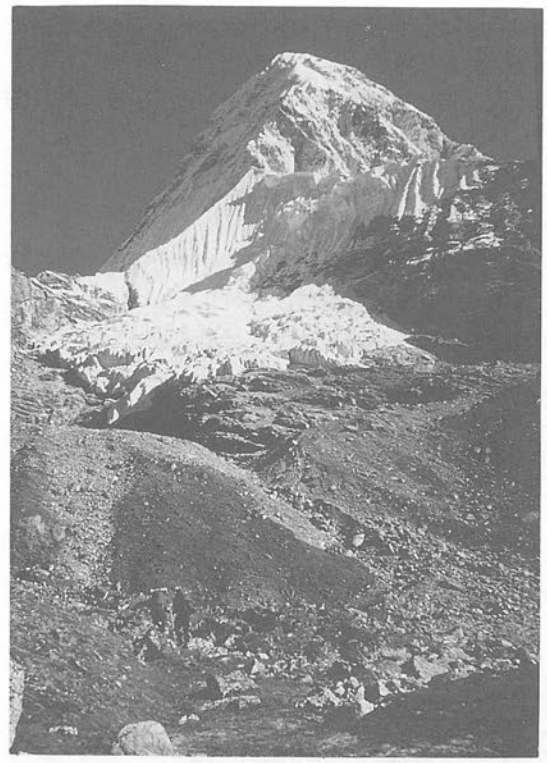
15、16、17、18日、レスト

極力日を伸ばし、雪が締まるのを待つ事にする。

19日、いよいよ最後のアタックだ。

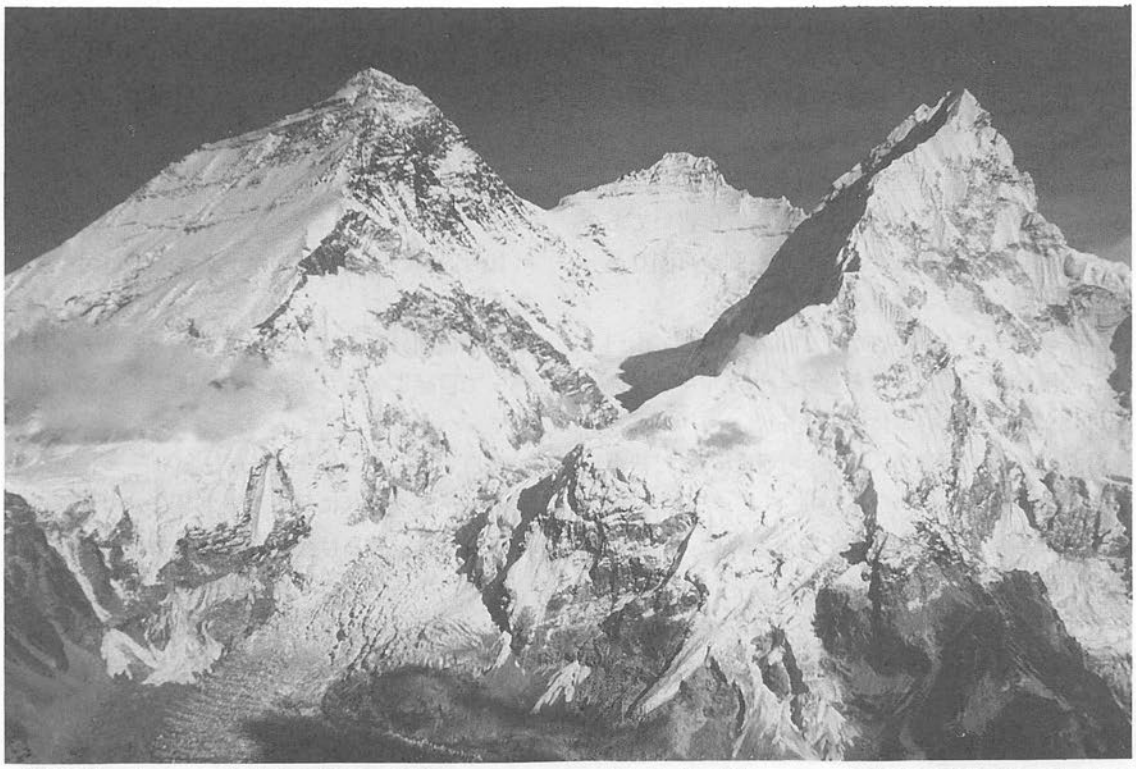
野沢井、田岡、山口でＣ２へ移動。途中、フィックス・ロープを３本はずして上げる。

20日、田岡が不調でアタックを断念する。



▼ＢＣ～Ｃ１間のモレーン帯

▼Ｃ２から見るエヴェレスト三山



野沢井、山口で、全装備を背負い出発。

前回の第三岩稜からのナイフ・エッジはかなり雪が不安定だったらしいので、リッジに上がらず西壁側をトラバース気味に登る。途中でフィックス・ロープが全て無くなり、時間もかなり経った。雪質も悪く、テントを張れる場所も無い。私の頭には敗退の二文字が浮かんだ。山口と相談すると上のリッジまで登ってから決める事にする。

スタカットで２ピッチ登ると馬乗りのナイフ・エッジに出たが数ピッチで雪面に消える。この雪面を削ればテントが張れそうだ。

二人でテン場を作り、テントを張り中へ入るとすっかり陽が暮れてしまった。このＣ３用テントは軽量化のためマジック・マウンテン社の夏用テントをフライなしで下からあげてきた物なので、非常に寒い夜を過ごした。

明日のアタックの打ち合わせをして眠りにつく。

登頂記

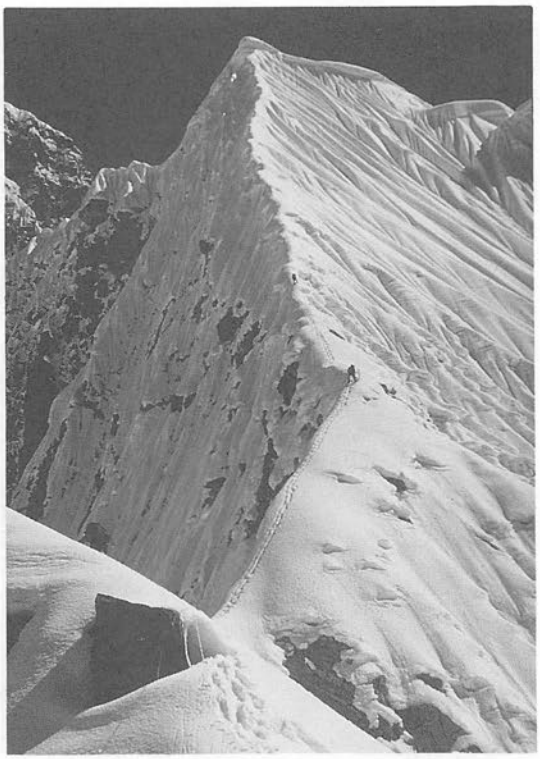
10月21日、３時起床。外は満月のため明るい。食事を済ませ、５時に出発。

テントは潰して行く。

ロープは結ばず、バイルとピッケルのシャフトを打ち込み登る。この雪壁は雪が安定しているので安心だ。

かなり寒く、手足の先がジンジンしてくる。

ＢＣと交信したいのだが余裕が無い。



▼Ｃ１～Ｃ２間のナイフ・エッジ

二人ともかなり良いペースで登り、大部上へ来ている。初めてＢＣとコンタクトする。小山はＢＣよりカラパタールの丘まで登り、私達を観察してくれた。

第一岩稜付近まで登ると傾斜もぐっと落ちた。さらに高い方へ登ると、過去の報告書に書いてある頂上クレパスがあった。これを左側から回り込むと頂上だった。７時登頂。

赤茶けたチベットが広がっている。そして山口はこの風景が見たかったと言う。サガルマータの上に陽が昇り、だいぶ体も温まった。

ＢＣへ登頂の報告を入れる。小山以外まだ皆寝てたらしい。

二人で写真を撮り合い頂上を後にした。

後向きになりＣ３まで降りる。

ちょうどオーストラリア隊がアタックに登ってきた。結局、彼らはルートの先頭に立つ事もなかった。しかしそれは私達だけでルートを延ばしていった満足感へと繋がった。

各キャンプを撤収しながら下る。Ｃ１に小山がサポートで登ってきてくれた。ラーメンとジュースを御馳走になり、ＢＣへと下る。

途中シェルパ達の出迎えを受ける。ダウラギリの時もこうして出迎えてくれた事を想い出し、又彼らと登山を共にしたいと思った。

ＢＣにはビールやたくさんの御馳走が並べられていた。

帰路キャラバン

10月24日、予定していたヤク４頭では足りず急拠５頭にする。

ＢＣに別れを告げ出発。ゴラクシェップやロブチェで世話になったサブジーに挨拶をして一路ペリチェへと下る。

25日　ペリチェ〜ナムチェ・バザール

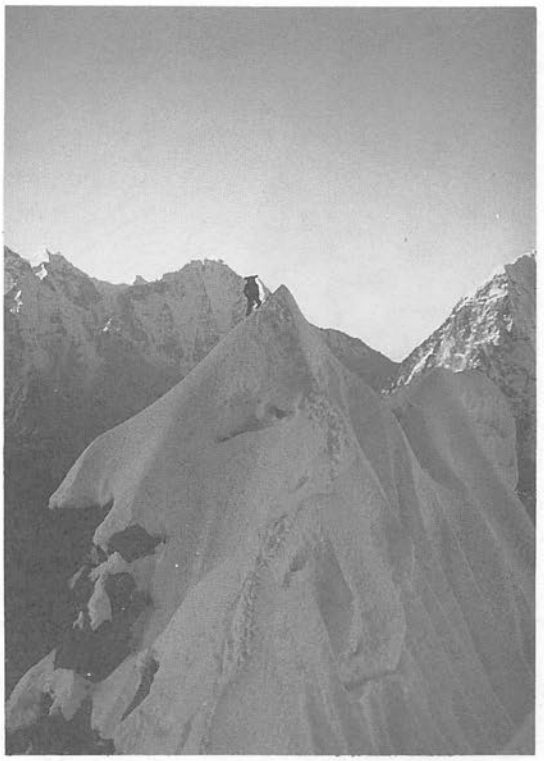
アム・ダブラムに登った東京ＹＣＣの人達と一緒になった。彼らは全員登頂を果たしたらしい。

26日　ナムチェ・バザール〜ルクラ

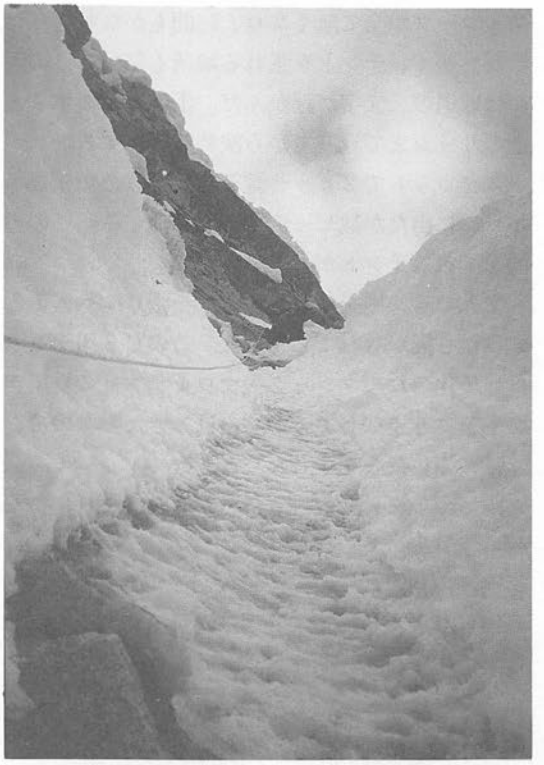
Ｓ.Ｐ.Ｃ.Ｃのオフィスへゴミを持って出向く。

ゴラクシェップで売ったＥＰＩが問題となり書類を書いてくれない。青い顔してサーダーがオフィスを飛び出し、30分後、ゴラクシェップのサブジーを連れてきた。たまたま私達のヤクと共にナムチェへ来ており、ちょうど帰る所を捕まえてきたらしい。

オフィサーに事情を説明し、後日ゴラクシェッ



▲Ｃ２上部のナイフ・エッジ



▲Ｃ２〜Ｃ３間の氷壁

▼頂上に立つ野沢井隊長（左）

▼山口隊員

プよりＥＰＩをナムチェまで降ろす、という事で書類を書いてくれた。

思わぬハプニングだったがなんとかクリアーしてルクラへ急いだ。

ルクラではチャン、ビールをしこたま飲んだ。

27日　ルクラ〜カトマンズ

飛行機で隊荷とともに無事にカトマンズへと帰る事が出来た。

残務整理を終え各自バラバラと帰国した。

おわりに

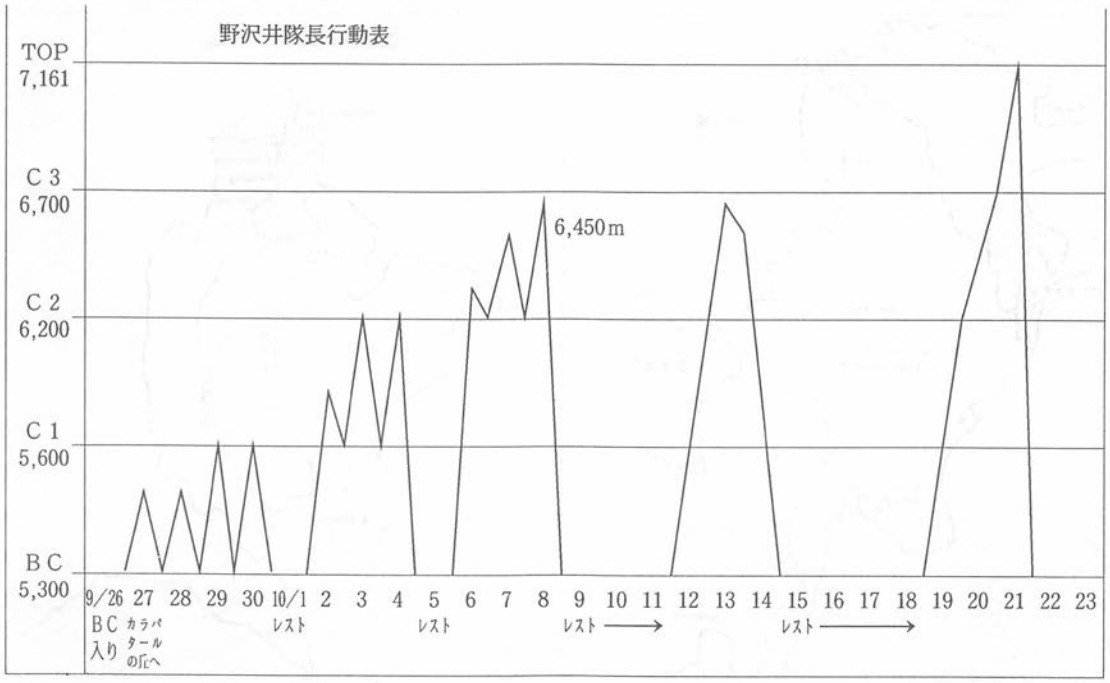
国内登山と同じ様にシンプルな形を目指したが、結局力不足のためフィックス・ロープをベタ張りする登山となってしまった。

また、全員登頂を目指したが２人だけの登頂で終ってしまった。やはり登頂できなかった者にとっては不満が残る事であろう。

然し、全員登頂に重点を置いて東稜のノーマル・ルートにすれば可能性は高まるであろうが、登山の面白さは半減したであろう。このあたりをメンバーの力と経験を踏まえ、十分に話し合う必要があったと思っている。

今回費用は１人38万円（エアー・チケットを除く）であげる事が出来た。現地の物を活用した結果だと思う。

初めての隊長としての登山で気苦労も多かったが、それをカバーしてくれたメンバーやネパール人スタッフに心から感謝しています。(野沢井:記)



地域ニュース

《ミャンマー》

幻の山、カカルポラジに挑む

ミャンマー（旧ビルマ）の北部辺境地帯に聳える同国の最高峰カカルポラジ（5,881ｍ）への正式登山許可が外国登山隊としては初めて一橋山岳会に下り、２月４日に偵察隊（引地真隊長ら３人）が現地に向かった。

同峰はミャンマーと中国との国境近くにあり、広義のヒマラヤ山脈の東端部に位置する秘峰。長い間、各国登山家の間で“未知の宝庫”としてあこがれの山であった。

カカルポラジは、イラワジ河の源流とブラマプトラ河の支流ロヒト河に囲まれた横断山脈の南西のはずれ、ミャンマーと中国チベット自治区との国境をなす背後のほぼ中心に位置している。

1922年インド測量局によって初めてカカルポラジの標高が記録され、その後、1930〜31年にクランベル卿とキングドン・ウォードがイラワジ河水源の探査のときに望見されている。

1935年にはロナルド・コールバックがサルウィン河踏査のアクセスにこの山域を通過してチベット側にディクブ峠を越えている。

1937年になって再びキングドン・ウォードはガムラン渓谷から4,500ｍの地点まで登って、カカルポラジの存在を確認している。

しかし、その後は日中戦争から太平洋戦争へと戦禍の時代を辿り、独立後のビルマ（現在のミャンマー）政権の鎖国的な体制などもあって、この地域を目指す登山者への扉は固く閉ざされ、半世紀以上にわたって“幻の山”とも云われてきた。

一橋大山岳会は、同峰への登山許可取得のため、粘り強い交渉を続けた末、１月25日閣議了解を得て、正式に入山許可を得た。

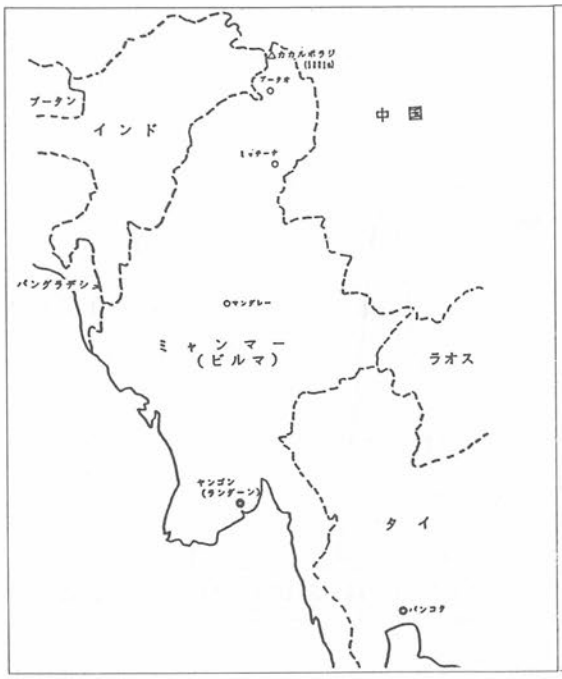
偵察隊は２月下旬から３月中旬にかけて同峰を偵察する。本隊は偵察隊の報告を待って12月から1996年２月にかけて同峰に挑む予定。

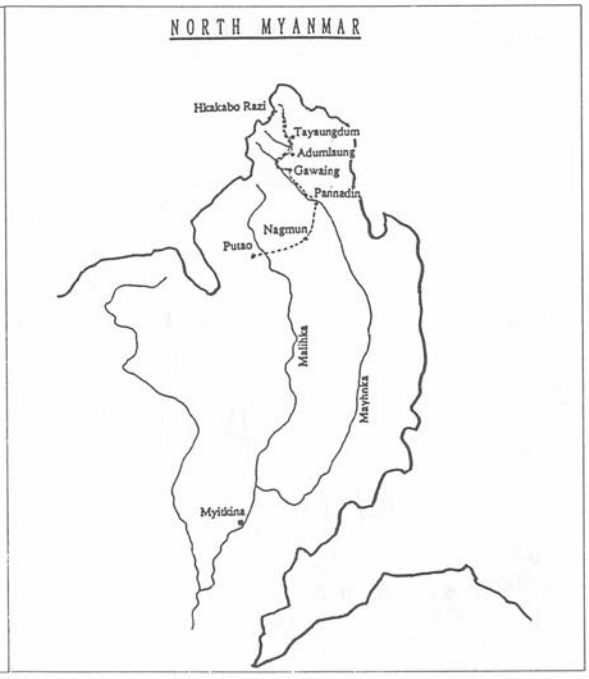
偵察隊は引地真隊長（37）の他、古田茂（24）、古瀬泰介（22）両隊員、両隊員とも同大山岳部の現役学生。

《中国》

ＪＡＣ、マカルー東稜

日本山岳会は創立90周年の記念事業として今春、





中国側からマカルー（8,463m）の東稜に登山隊を派遣する。

マカルーは1955年にフランス隊によってネパール側の北西面から初登頂されて以来、多くの登山者を迎えているが、それはネパール側だけで、未開放の中国側は手付かずに残されていた。

東稜は4,000mを越えてから頂上まで約9kmもある長大な尾根で、雪稜、岩稜、ナイフ・エッジが続き、長大なルート攻略はトランスポートがスムーズにいくかどうかがカギになりそうである。

同隊は東稜基部の4,100m付近にベース・キャンプを設けた後、C1（4,500m）、C2（5,000m）、C3（5,700m）、C4（6,400m）、C5（7,000m）、C6（7,700m）と6つの前進キャンプを建設し、アタックの時は、8,200m地点にビバーク・ポイントを設けて頂上攻略をする予定。

偵察を兼ねた先発隊が2月15日に出発し、本隊は3月上旬に出発する。

総勢15名の陣容は以下の通り。

総隊長・藤平正夫（70）、隊長・重廣恒夫（47）、登攀隊長・山本宗彦（35）、隊員・渡辺雄二（44）、馬場博行（46）、田辺治（34）、山本篤（32）、谷川太郎（27）、岡本憲（26）、小野岳（34）、松原尚之（29）、竹内洋岳（24）、荒井俊彦（23）、マネージャー・田久和義隆、医師・志賀尚子。

日大はチョモランマ北東稜

日本大学では桜門山岳会（OB会）の創部70周年を記念して、体育会山岳部のみならず医学部、工学部、国際関係学部、歯学部、理工学部の各山岳部、岳影会などオール日大遠征隊を組織してチョモランマ（8,848m）北東稜に挑む。

未踏の北東稜登山のタクティクスは、北稜にサポート隊を投入してルートを確保し、北東稜隊を収容した後、アタックを図る、と云う。

同隊は3月下旬に東ロンブク氷河にABC（6,500m）を設けた後、北東稜上にC4（7,100m）、C5（7,990m）、C6（8,360m）と前進キャンプを展開し、北稜と合わさってからさらにC7（8,680m）を建設して頂上を攻略する。

メンバーは以下の通り。

総隊長・平山善吉（61）、隊長・神崎忠男（54）、副隊長・池田錦重（56）、登攀隊長・古野淳（33）、隊員・忍田剛（33）、井本重喜（32）、家口寛（26）、野本（25）、田端宏好（25）、田村幸英（23）、原田智紀（21）、マネージャー・原田義隆（59）、医師・小川郁男（47）、鈴木武樹（39）、大前義孝（28）、

他に学術隊員5名、報道隊員9名が同行。

長山協はチョモラーリ峰へ

長野県山岳協会は中国登山協会と合同で、1996年秋に中国・チベット自治区とブータンの国境に聳えるチョモラーリ（7,314m）に登山隊を派遣する。

登山隊は今秋に偵察隊を派遣した後、96年9月～10月にかけて本隊を派遣する予定。

チョモラーリはブータンの聖なる山として古くから尊崇されてきた山である。1937年にブータン側からS.チャップマンらの英国隊によって初登頂された後、1970年にインドのN.クマールの率いるインド・ブータン合同隊によって同じくブータン側から第2登されて以来、閉ざされてきた。

一方、チベット側はチベットのラサとインドのダージリンとを結ぶ交易路の近くに聳えるため古くから良く知られた山であったが、長い間未開放だったため手付かずのまま残されていた。

韓国は2つの未踏峰へ

ヒマラヤへの躍進著しい韓国隊が今年はチベットの2つの未踏峰に挑む。2峰は、以前高額な初登録料で話題をまいたチョブカン（7,048m）昨春HAJ隊が断念したルンポ・カンリ（7,095m）。

事務所移転募金協力者ご芳名

15口～松舘正義、5口～清水修・純子、新郷信廣、遠藤喜重郎、鳥井修一、杉田和子、2.5口～白沢真弓、2口～長繁夫、小田切直人、金保國、森茂、坂本真沙留、1口～今野昌雄、牧野総治郎、田村正勝、森田千里。

2月14日現在の累計額は1,923,500円

（敬称略）

インフォメーション

第2回高所登山 事故と環境対策研修会

昨年開催して好評を博したＨＡＪの標記研修会を下記の通り開催します。高所登山やトレッキングを計画されてる方の参加を求めます。

日　時　4月2日（日）9時〜17時
会　場　東京都勤労福祉会館第一洋室Ｂ
　　東京都中央区新富１－13－14
　　☎03-3552-9131
交　通　地下鉄日比谷線八丁堀駅下車１分
参加費　3,000円
定　員　50名
締め切り　3月25日（定員になり次第締め切り）
申し込み　日本ヒマラヤ協会
　　〒170　東京都豊島区東池袋4-2-7
　　萬栄ビル501号　☎03-3988-8474
　　参加費は下記宛てで送金下さい。
　　郵便振替番号　00100-6-48954
　　口座名　日本ヒマラヤ協会
内　容　高所医学の基礎知識
　　群馬大学医学部付属病院　斎藤繁氏
　　雪崩からいかに逃れるか（ＨＡＪ事務局）
　　クレバス転落、落石、疲労凍死、落雷、ロープ切断等の事故について（ＨＡＪ事務局）
　　テイクイン、テイクアウト（環境保護活動、山森欣一）
　　※会場にはガモフ・バック、パルスオキシメーター、雪崩ビーコンなどを展示し、自由に使えます。

3月の東京集会

3月の東京集会は下記の通り開催します。

日　時　3月27日（月）19時〜
会　場　ＨＡＪルーム

1995年パキスタン登山隊一覧

山　名	標　高	国　名	隊　長　名	隊員数	登山期間
K　2	8,611m	スペイン	Josep Aced	5	5／1から120日
〃	〃	〃	Jose Antonio Garces	10	5／10から120日
〃	〃	オランダ	Ronald Naar	5	5／15から120日
〃	〃	アメリカ	Robert John Slater	15	6／1から120日
〃	〃	〃	Larry G. Hall	12	6／1から120日
〃	〃	三ヶ国合同（＊1）	Peter Hillary	8	6／15から120日
ガッシャーブルムⅠ	8,068m	スペイン	Jesus Mari Late Rernardo	5	5／10から 90日
〃	〃	スロベニア	Janez Golob	6	5／15から 90日
〃	〃	韓　国	Bong Wan Jang	12	6／1から 90日
〃	〃	中国(西蔵登山協会)	Samdruk	4	6／15から 90日
〃	〃	チェコ	Dipl Ing Zdenek Podle	10	6／30から 90日
〃	〃	アメリカ	Philip C. Poners	5	7／20から 90日
ガッシャーブルムⅡ	8,035m	オーストリア	Dipl Ing. Gaubmann	6	4／25から 90日
〃	〃	スイス	Karl Kobler	5	5／18から 90日
〃	〃	ドイツ	Hans Eitel	15	6／3から 90日
〃	〃	山岳同人B.S.R.	松田宏也	23	6／15から 90日
〃	〃	イタリア	Francesco Santon	5	6／15から 90日
〃	〃	ドイツ	Reinhardt Tauchnitz	7	8／4から 90日
ブロード・ピーク	8,047m	スペイン	Abrego M. Castillo Mays	7	5／25から 90日

山　　名	標　高	国　　名	隊　　長　　名	隊員数	登 山 期 間
ブロード・ピーク	8,047m	韓　国	Chan-Gi Park	8	6／5から 90日
〃	〃	日　本	戸高雅史	4	6／5から 90日
〃	〃	ドイツ	Peter Kowalzik	10	6／15から 90日
〃	〃	アメリカ	Scott Fischer	15	7／2から 90日
〃	〃	ドイツ	Christian Walter	5	7／10から 90日
ガッシャーブルムⅣ	7,925m	アイルランド・南ア	Ralph Hance	6	5／1から 60日
トランゴ・タワー	6,257m	スペイン	Miguel Zebalza, San Fermin	11	5／22から 60日
トランゴ・無名峰 ムスターグ・タワー	6,239m 7,273m	アメリカ・ロシア	Lev Liffe	7	7／1から 60日
トランゴ・無名峰	6,239m	札幌F.C.	松本一敏	5	7／20から 60日
ネームレス・タワー	6,239m	イギリス	Paul Liam Pritchard	7	7／1から 60日
ネームレス・タワー	—	アメリカ	Eric Malcolm Braned	5	6／10から 60日
ラトックⅡ	7,108m	ドイツ	Jan Persch, Rote Hahnen	9	7／10から 60日
パインター・ブラック	7,285m	フランス	Fascal Chataing	2	6／15から 60日
〃　　Ⅲ	7,350m	アメリカ	Chris Walburgh	6	7／20から 60日
チョゴリザ	7,665m	アメリカ	John Midhael Climeco	4	7／20から 60日
スキルブルム	7,360m	イタリア	Livio Vis Intini	7	7／24から 60日
K-7	6,935m	アメリカ	P. Buhrar	4	5／18から 60日
マッシャーブルム	7,821m	ドイツ	Falk Liebstein	5	5／20から 60日
〃	〃	アメリカ	Gany P. Hilm	4	6／1から 60日
〃	〃	〃	Allen Scott Moore	6	6／18から 60日
ルプガル・サール	7,200m	韓　国	Ho Young Kim	4	6／10から 60日
キンヤン・キッシュ	7,852m	ＨＡＪ	飛田和夫	3	6／12から 60日
ウリ・ビアプォ	6,083m	スペイン	Josep Masip	10	7／1から 60日
ボビスギール	6,416m	イギリス	Robert Charles	4	8／16から 60日
スパンティーク	7,027m	スイス	Martin Stetter	8	6／4から 60日
ディラン	7,257m	三遊楽会	中元建生	5	7／21から 60日
ウルタル・サール	7,338m	オーストリア	Thomas Buben	1	6／10から 60日
ティリチ・ミール	7,338m	カナダ	Brad Wrobleski	5	4／15から 60日
〃	7,708m	バーバリアン・クラブ	野沢井渉	2	6／1から 60日
〃	7,708m	イギリス	David Hamilton	8	6／17から 60日
イストル・オ・ナール	7,400m	オーストリア	Stauber Reinhold	9	7／25から 60日
ブニ・ゾム	6,551m	北海道大学	斉藤清克	9	6／15から 60日
無名峰	6,190m	アメリカ	Angela J. Hawse	6	7／18から 60日
ナンガ・パルバット	8,125m	千葉工大	坂井広志	8	5／15から 60日
〃	〃	イタリア	Oscar Piazza	4	5／20から 60日
〃	〃	アメリカ	Ed Darack	5	6／23から 60日
〃	〃	江北山の会	細田一郎	8	7／1から 60日
〃	〃	イギリス	Dong Scott	5	7／12から 60日
〃	〃	スビダニェ同人	坂原忠清	5	7／21から 60日

＊1：オーストラリア／ニュージーランド／スエーデンの合同

ヒマラヤ放浪

ナンガ・パルバットの山旅

岩崎　洋

遠い昔、印度亜大陸とユーラシア大陸がぶつかりあった所。ヒマラヤ諸国を旅してみれば何となくは分かるのだが、カラコルム・ハイウエーを遡って行くと、マサラの香りが消え失せて羊の匂いがしだす場所がある。その区別を明確にするために神々が作り賜うたのか、それとも唯の捨て子なのか、気の遠くなるような星霜を重ね、動く事も無くそれはたぶん在ったのだろう。

私は歩いていた。氷河の水が湧き、緑生す、あの天上の園のようなルパールの谷へ向って。其処を天国と言うなら、此処は紛う方なき灼熱地獄だ。一筋の蜘蛛の糸のように延びる。荒れた今にも崩れそうな道を私は歩いていた。「暑い、なんでこんなに暑いのだろう」乾燥しきって汗もかかない。顔面は少しずつ昇華した汗で白くなって行く。遥か断崖の下方に川は流れているが顔を洗いに行くには少々遠い。

誰かを拒んだら立ち所に消えてしまいそうな道を、時折、風景に溶け込んだような車が通る。手をあげればえたいの知れない東洋人でも彼らは気持ち良く乗せてくれる。たとえそれが300m先の分岐迄であってもだ。古からの智慧なのか、習慣なのか、彼らはとても旅人に優しい。歩いてはトラクターにしがみつき、もう少し歩いては軍隊の車に立ち乗り、フーと木蔭で一息。ジープが見えれば慌てて走り出す。

*

初めて来た時には日本、ドイツ、パキスタンの混成7人とそれに運転手と助手の計9人でジープの箱乗りをしながら我々の平衡感覚を超えている道を行ったものだった。山もトレッキングも知らない奴ばかりだったが、旅行者の馴化能力はたいしたものでとてもしぶとい。シュラフが無ければ毛布、マットの無い奴はスポンジや竹のゴザ、もちろんテントなど無いから軍隊用ポンチョを7人で2枚、アーミーシューズ、タウンシューズ、ビーチサンダル、ジャケットの無い者は毛布を巻きつけ、まるで貧乏旅行者の見本市のようだった。

毎日ライス・スープを食し、時々パスタを使ったヌードル・スープやマサラ味水団に蘂(アカザ)を入れて食べた。

肉食のドイツ人は岩の上で昼寝を決め込むマーモットをなんとか自分の胃袋に収めたいと願っていたようだが、もとよりライフルなど持っているはずも無く、石、此の太古から我々が愛用して来た狩猟具兼武器と古代人以下の動物的本能。これでは近づく事さえ出来ない、「キュキュ、ケケケケケ、」とおちょくられるばかりで、アストールのレストランに行く迄彼の胃袋は満足することがなかった。

この時は数週間をルパールの谷に遊びマゼノ・パスまで行って1泊してルパールに引き返した。

*

歩きと車の乗り継ぎで1日半、やっと天国の入口タルシンに着く。もう暑くはない。村でもらった収穫したてのジャガイモを雑炊にして食べ、トボトボとモレーンを登り、氷河に入ってオープン・ビバークする。ナンガに遮られ一寸空は狭いが、夏のルパールは太古の星空を見せてくれる。違う事と言えば宇宙の運行に逆らう人工の星が時々横切る事位だろう。

翌日、ヴィズィン（南東柱状岩稜ＢＣ）の岩小舎に泊まり、朝から小川のせせらぎに耳を澄まし、鳥の声を聞き、辿って来た道と氷河から上の世界を思い、自分の今居る世界が充分過ぎる程満たされた。平和な小宇宙のように思えて、動く気も無く、穏やかな日差しの中、ウトウトしかけた頃突然それはやって来た。四千数百メートルの彼方から、雲一つ無いクリアなナンガ・パルバットのヴィズィン・フェースにボワッと一点、兎の産毛のよ

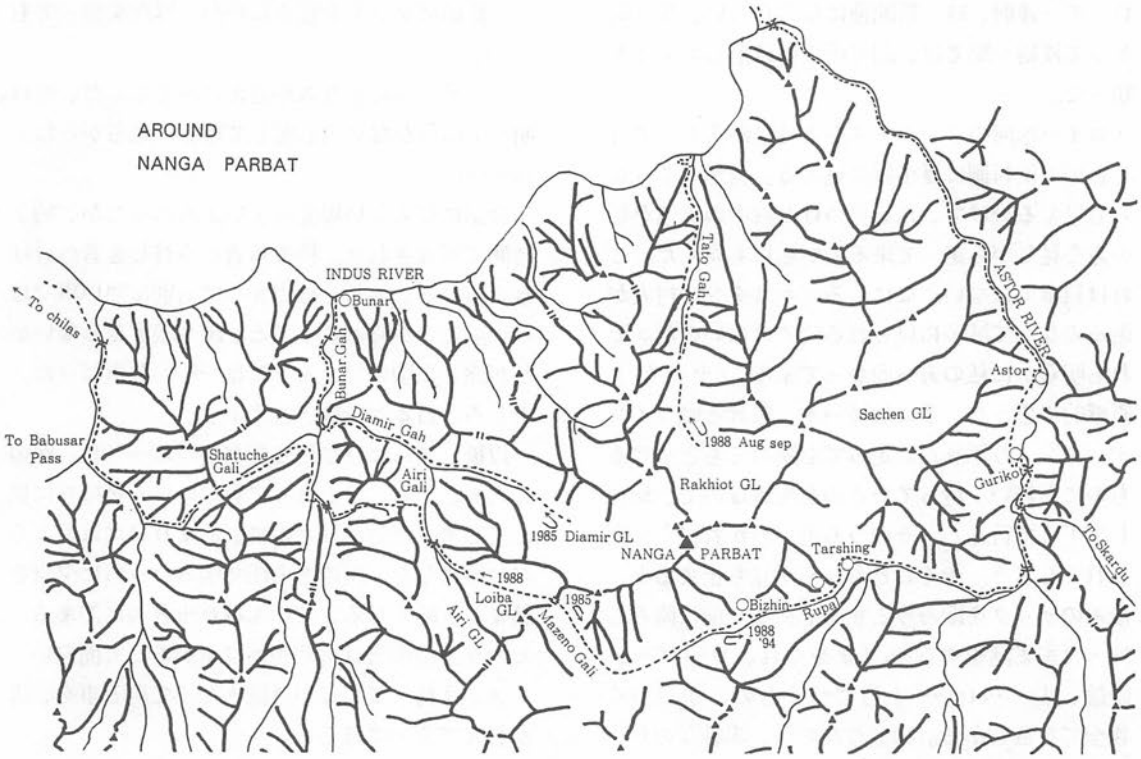
うなものが生まれた。それはゆっくりと不鮮明な三角形の裾を拡げるように、音も無く巨大化してナンガを覆い隠して行く。世界は一瞬凍り付き、鳥も小川も沈黙して平和な小宇宙は上から圧し潰されようとしていた。グウォ、グウォ、グウォー、腸に響く音と共に氷河に落ちて来た。それは苦悶する生き物のように悶えながら氷河を這いこちらに向かって来る。時間はスローモーションから齣落としの映画のようになり、その美しさに見蕩れていた私も岩陰に身を隠す。グウォーン、グウォー、小宇宙は何処かに消し飛び、私はそれに呑み込まれて咆哮を聞いた。身は凍え声も出ない。なにしろパンツ一丁で昼寝していたのだから。やがてそれは轟音と共に通り過ぎて行った。

「助かった、兎に角何か着る物を」、と思う間も無くそれは対岸の山にぶつかり、上昇し渦を巻いて戻って来た。そしてそれは融け、消えた。土砂降りの中、為す術も無く、呆然自失。一瞬の出来事であった。小川のせせらぎ、鳥の声、既に何事もなかったかのように、太陽は輝いていた。

ラトボ（中央側稜ＢＣ）では１人石を積んで別荘？作りに励み、寝たまま夜空の眺められる１人用の家を建てた。隣には氷河の水を集めた大きな湧水があり、薪はすでに一生分はあったので問題無く、小麦粉と米、油少々と塩、毎日大きな焚火をして、結構仕合せな時間が過ぎた。が、天国とは言え生身の私は霞（かすみ）を食べる事も出来ないので、何時かは灼熱地獄を通って何処かへ行かねばならない。同じ道を帰るよりは反対側へ行ってみようとマゼノ・パスへ向かう。隣とは一番近くて遠い所、何か面白い事があるかもしれない。

峠には昔我々が石を積んだカルカが残っていたが、１人で泊まっても寒いだけだし、未だ陽も高いので、さらに右上して稜線に立つ。峠とは不思議な所だ。生活臭がある。人間の匂いがする。其処だけが人が通る事を許された場所だからだろうか。頂は目標であり、折り帰し点であり、終点だが其処に人間臭を嗅いだ事は無い。峠は道の続く限り其処に立てば次の世界が見え、稜線に続く別の世界も見る事が出来る。

彼方の稜線に美しく弧を描いたコルが見えた。一寸した衝動にかられ、あそこは何処だと地図と見比べながら捜してみる。等高線も無い地図だが無いよりましと言うもので、其処を越えても、印度では無く。インダスに、それもブナールに出られると分かり、夕食の小麦粉を少し減らす事にす



▼メルヘンヴィーゼの子供達

る。その分水を足した事は言う迄も無い。

ロイバ氷河側の岩棚でビバークの後、前日適当に下って来た罰が当たり、氷の付いたルンゼを運動グツでクライム・ダウンする羽目になった。

——月蝕の夜、モスリムの男達は不吉な月蝕を祓いさろうと、空に向かってカラシニコフ（AK－47）を一連射、時々新聞種になるらしい、空に向かって鉄砲を撃てば、同じ所に弾は落ちて来ると知った。——

ロイバ氷河のクレヴァスをよけながら下って行くと川の反対側に夏小屋が見える。当然向こうからも見える分けで、私を見つけた村中の男達が私の方を見ながら走って来るのが私にも見えた。これは只事ではない。なにしろパキスタンで村人が走るのなんて滅多に見られる物ではないのだ。それも明らかに私の方へ向かって来る。「ヤバイ、」直感的に思うが、手には枝一本。騎兵と戦うインディアンより不利だ。走っても隠れてもどうなるものでも無い。待っているのも業腹なので、無視して下って行くと、そのうち追いつかれ村人に囲まれてしまう。歩くこともならず立ち止まると、後ろのザックを取ろうとする。荷物を前に降ろし、持ったまま話をすると、「金をくれ、ロープを、眼鏡、薬……etc……」目につくもの、思いつく物全てを欲しがる。物取りなのか、素朴なのか、人間的なのか判断に苦しむが、取り敢えず、取られて平気な物など持ち合わせていないので、仕方が無い、ハッタリだ、ウルドゥーに英語を混ぜて…

「ポーターとガイドを雇わないか？」

「下の村に友達が居るんだ、其処迄は前にも来た事があるから要らない」

「此処にテントを張らないか、写真を撮ってもいい、」

「ブナールにポリスが迎えに来てるんだ、今日、明日中に行かないと心配して捜しに来るからね」etc……

会話にならない場面もずいぶんあったが、約1時間で解放された。持てる者から貧しき者へ分け与えられる。もしくは力ずくでも別に悪い事ではない。どこからどこまでと、国も限定はしないが、私が旅した国のほとんどでは一般的な事だった。むしろ、日本が特殊と言えよう。

以後、彼らより物持ちでないのに——私、嫁の一人も、牛も、羊も持っていない——物持ちに見えてしまうと分かったので、あまり村には近よらない事にした、水のある所で明るいうちに夕食を済まし、暗くなるまでのんびり歩き森に泊まる。ヒマラヤ山中とは言え色々な所があって面白い、アメさえ持っていない外国人だって居る事を、誰か教えてやってほしい。

▼ルパール村の娘

マゼノから見た峠は思った通り美しい所であった。一定のカーブで描かれた草原状のコルは、巨大なハンモックのようで心地好い。大地に揺られ暫しまどろむ。

此の峠、何故かブッシュの中に足の踏み場も無い位バッタだかイナゴだかが居て、思わず例の映画を想い出してしまう。食べてみようとも思ったが、当時経済的理由からベジタリアンだったので許してやった。しかし歩く度にゴメンナサイ、ゴメンナサイと繰り返しながら峠を越えるのに何匹も天国に送ってしまった。

まどろみから醒め、ふと、遠くを見ると、彼方に此の峠より高くて急そうなコルがおいでおいでしている。3,803m、それを越せばチラスに出られる。バス代も浮く。一石二鳥だ。又、昼食用の小麦粉を減らし、食べられそうな野草を見つけながら下って行ったのだった。

越えても越えても道は続き峠はある。引きつける力と離れようとする力が釣り合ってしまうとグルグル廻り続けるしかないらしい。困った。もう塩と小麦粉しか無い。

下りきった所にある小さな村は何故か郷愁を感じさせる村だった。もとより日本にではない、何処にだろう？

水路の水で顔を洗い、クルミの木影に寝転がる。葉擦れの音を聞きながらウトウト。梢を渡る風の音、小さなオアシス、桑の木影の縁台、玉蜀黍畑、手斧でけずった板、粉碾き小屋、もう一度行ってみたい。

女たちに薬、男達にクライミングテープ、子供達にアメ玉、それとあの時の写真をザックにつめ込んで、そうすれば胡桃の木影で思いっきり昼寝を決め込む事が出来る。

小麦粉は水のように薄めてあと2回分、別に村で分けてもらえばいいのだが、あまり世話にもなりたくない。体力はもう限界に近いようだ。帰ったらチャイを飲んでマトンカレーを食べよう。もうベジタリアンは止めだ。

峠に立ち後を振り返る。越えて来た峠とナンガ・パルバットを暫く眺め、もう満足しなければといいきかせ真直ぐに走り降りる。

今年の4月またルパールへ行った。前に比べれば少しは道も良くなり、夕方でもアストール行の乗り合いがある。数年後にはルパール迄道を通すとも聞いた。しかし何時見てもナンガは高く険しく、私にとっては遠い山だ。

（3、June、1994）

▲チャドルの下は仲々おしゃれ

中国高峰登山15年小史(1)

中華人民共和国（以下中国と略す）は、1980年から自国の山々を外国登山隊に開放した。それから昨年1994年で15年の歳月が流れた。

この間世界最高峰チョモランマをはじめ、チョゴリ、チョー・オユー、シシャパンマ、ガッシャーブルムなどの八千メートル峰は云うに及ばず、七千、六千、五千メートル級の山々には、未踏峰を求めて登山者が殺到した。

また、広大な国土に残された未知で新鮮な山野を世界中の人々が見逃すはずもなく、高原、砂漠、河を舞台にした探検、踏査や河下り、熱気球などいわゆるアウト・ドア・スポーツも盛んに行われるようになった。

登山は何よりも行為が第一であるが、垂れ流しと言われない為には、自らの記録を纏め発表することも大切である。

これらの発表された貴重な記録をもとに、新中国になって開放された、中国登山のこの15年間（1980－1994年）を日本隊を中心に纏めてみた。

（文責：山森欣一）

■開放前の中国登山

中国とインド、ネパール、ブータンの国境に屏風のように立ちはだかるのが、いわゆる世界の屋根と呼ばれるグレート・ヒマラヤである。

開放前（1980年の開放以前のこと。79年以前に偵察活動が行われたが、これは含まない。）に行われた中国側ヒマラヤへの挑戦は、既に纏められているのでここでは省略した。

開放前の中国内陸部の高峰における外国隊による登山活動としては、中国の登山運動が始まる前に四川省横断山脈のミニヤ・コンカ（7,556ｍ）がアメリカ隊によって初登頂された記録があり、その後数隊が同峰周辺で活動した。

また、古くから知られた中国側パミールのムスターグ・アタ（7,546ｍ）には、ヘディンやスタインが試登、シプトンとティルマンが頂上に迫った記録が残されている。（２人はこの他にも、ボゴダやチャクラギールの試登も行った。）

中国隊による登山活動は、旧ソビエト（以下旧ソと略す）の指導を受けて1955年から始まった。旧ソの高峰でトレーニングを積み重ねた後、自国内での高峰登山に向かった。そしてムスターグ・アタとコングールチュビエ（7,530ｍ）を旧ソと合同で初登頂したのを皮切りに、四川省のミニヤ・コンカの登頂、前出２座の再登などを行い、高所登山の経験を積み重ねて行った。

これらの経験を受けて、1959年遂に旧ソと合同でチョモランマに登山することになる。そして道路建設も終え、ＢＣに荷物を集結して旧ソ側隊員の到着を待つだけとなっていたものの、折から勃発したチベット動乱のため計画は中止された。

ところが、翌年中国と旧ソは冷戦状態に入ってしまった。このため中国は独自にチョモランマ登山を実施することとなり、1960年５月25日午前４時20分、かってイギリスが執念を燃やした北東稜からの初登攀に成功したのはご承知の通りである。

また、チョモランマ成功の勢いは止まることなく、1964年には地球上最後の八千メートル峰となったシシャパンマの初登頂にも成功した。

だがしかし、1966年から始まった文化大革命の嵐は、中国全土のありとあらゆる職場に吹き荒れ、登山関係者としてその災難から逃れられる術がある訳も無く、折角芽生え根ずこうとしていた中国登山運動は、10年で挫折したのであった。

猛威を振った文化大革命であったが、林彪が失脚した1972年頃から流石に勢いも衰えはじめつつあった。その中で中国登山界も少しづつ動き始め、世界の登山活動の発展に呼応するため、1974年再びチョモランマの登頂を目指す準備に入った。

こうして1975年５月27日午後２時30分、10年間

の空白をものともせず女性一人を含む9人が、チョモランマの頂を踏んだのであった。

また、旧ソとの冷戦は領土の問題までに発展し、中国は1977年夏新疆の旧ソとの国境にあるトムール（7,435m・旧ソではポベーダ）に登山隊を派遣した。そして7月25日と30日の両日にわたり、28人の大量登頂を実現したのである。

■開放前の中国ヒマラヤへの熱き想い

世界中の岳人で、中国の山に登りたくない者がいるだろうか。しかし、第二次世界大戦が終わっても中国は国民党と共産党の激しい内戦が続いた。この戦いの中、1949年10月1日に共産党は［中華人民共和国］の建国宣言を行った。その後も共産主義の旗印の下に、祖国の建国の真っ最中であり登山どころではなかった。

前述したように中国が自分達の登山活動を始めたのは、大戦終了後10年たった1955年のことであり、中国登山協会が正式に発足したのは、3年後の1958年である。この頃は外国の登山隊（旧ソを除く）を受け入れられる状況にはなかったのである。

しかし、世の中が少し落ち着いて来ると、世界の岳人が手をこまねいている訳も無く、1955年には日本登山界の先達であるAACKが、中国科学院長で日本に馴染みの深い郭沫若を通して登山の打診を行った。（ヒマラヤへの道・P359）

さらに1964年には東北大学山の会も、中国登山協会に中国と合同による登山と学術調査の申請を出した。（チベット高原の盟主－ニェンチェンタンラ・P17）

また、全日本山岳連盟は1957年に中華全国体育総会に合同登山の申し入れを行ったが、翌年に［まだ登山組織ができていない］と断わられている。しかし、これにもめげず、62年春にネパール・ヒマラヤのビッグ・ホワイト・ピーク（現在はレンポ・ガン6,979m）を初登頂したのを期に、再び［全日本山岳連盟］会長・尾関広と海外登山委員長・高橋照の連名で、［中華全国登山家協会］首席・栗文彬宛てに、64年春に合同でシシャパンマに登山したい、と申し入れを行い、その後も何度か文書のやりとりが続いた。

▼中国登山運動史

だが、皮肉なことにシシャパンマは1964年5月（日本側が合同登山を希望した時期）に中国隊によって初登頂されるのである。

以上紹介したのは、あまたあったと思われる日本から中国に対する登山申請の一例である。このように日本だけでも、ありとあらゆる可能性を求めて、岳人達は中国登山の実現に奮闘努力していたのであった。

1972年には田中角栄首相の訪中によって、［日中国交正常化］が実現した。このことによって、中国登山の可能性も今までの雲を掴むような手探りの状態から、一歩も二歩も前進するかに思われた。

ところが前述したように、当の中国国内はまだまだ［文革］が継続中であり、国交の正常化が実現したからといって、すぐに外国の登山隊を受け入れるような状況にはなかったのである。

だが、国交正常化以後に日本から出された公式、非公式の登山・学術申請は国交正常化以前に比べると飛躍的に増えた。ちなみに当時の中国登山協会・史占春副主席は、開放初期の1981年に発行された［中国の高峰］の中で1955年中国登山活動が誕生してから20年間に、30ケ国以上の100余りの団体や個人から、相前後して登山申請があった、と書いている。（同書・P8）

そして、1993年に中国で発行された［中国登山運動史］には、申請は日本が40、オーストリア11、アメリカが7だったと紹介しており、その他の国名も18上がっている。（同書・P208）

しかし、これらの申請に対しては、中国側からは国交正常化前と同じく［登山組織を準備中］と

の回答しか来なかったのである。当時の中国国内の状況を考えると、これは致し方のないことであったと言えるだろう。

中国には［龍（辰）の年には首脳が死ぬ］という伝説があると云う。1976年は正に龍の年でその通りになった。即ち、中華人民共和国を創り上げた［長征組］の巨頭のうち最もビッグな毛沢東、周恩来、朱徳の3人が相次いでマルクスに会いに行ったのである。

以後、華国峰による4人組の逮捕、その華国峰の失脚と続き、鄧小平が政権を握り［4つの近代化］を推進する中で、改革・開放の一環として岳人待望の中国登山が解禁される運びとなった。

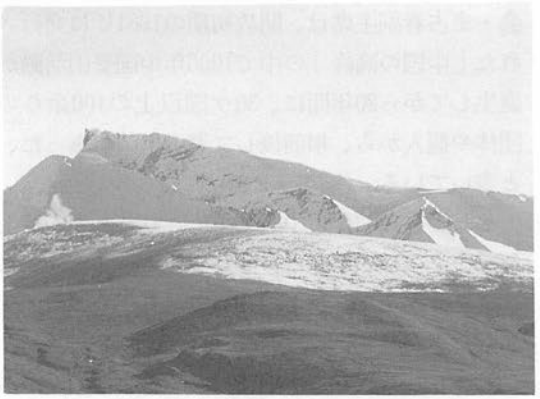
この間、国家体育運動委員会や旅遊局で、開放に向けた具体的な作業が進み、1978と79年には、史占春らがネパールに赴き、観光省や旅行社を訪問し、これらを参考にして具体的な規則作りを行い、1979年9月国務院の承認を得て、世界に発表されたのである。（中国登山運動史・P210〜212）

■開放後の中国登山の概観

中国は1979年9月チョモランマ、シシャパンマ、コングールの二つの峰、ムスターグ・アタ、ミニヤ・コンカ、アムネマチン、ボゴダの八つの山を1980年から外国人に開放することを発表した。

これを皮切りに以後チョゴリ、ガッシャーブルムなど済し崩し的に次から次へと高峰が開放されて行った。

それぞれの山々の状況については、山域別に整理するが、山群の主峰や話題になった山など、主な山の登頂を列記すれば別表のようになる。



▲1987年日中合同隊が初登頂したラプチェ・カン

この他に八千メートル峰を中心にありとあらゆる困難な登山が繰りひろげられた。たとえば、チョモランマだけをみても、メスナーは完全な単独無酸素で登頂に成功したし、ロレタンとトロワイエのペアーは、往復44時間でチョモランマ北壁をアルパイン・スタイル勿論無酸素で登下降した。

また、登頂に成功はしていないが、1983年からは、チョモランマを冬に登ろうとい意欲的な試みが、カモシカ同人や長谷川恒男によって実践された。

そして、1988年には、国境を越えた南北縦断計画が、中国、ネパール、日本三国によって実践され日本側では、山田昇が北から南へと縦断に成功し、同行取材をしたテレビ・カメラが頂上まで持ち上げられ、日本の茶の間に生で頂上の映像が映し出された。

こうして見ると、未踏峰の分野では圧倒的に日本隊の活躍が目立つ。これは、何も地理的に日本が中国に近いばかりが原因ではないと思う。

これまでも日本隊は、ヒマラヤが新しく解禁されるとドッと押し掛け、熱が冷めるとさっと引き上げた歴史がある。カラコルムもガルワールもカシミール、ガンゴトリもブータンもそうであった。

ところが中国登山熱だけは、相変わらずの盛況が続いている。これはただ単に中国の国土が広いばかりが原因ではない。

中国登山が解禁された当初は、［中国登山は高くつく］との風評が立った。事実未踏峰や外国隊が初めてトライする山については、特別な料金設定がありコスト高であったのも事実である。それでも登山隊が減少しないのである。

その理由の一つに［戦争の加害者意識］があると思う。日中戦争で日本は中国を侵略し、中国の多くの地域に爪痕を残して来た。その後ろめたさを感じている年代層が登山隊のスポンサーになっていることが多いのである。

この種の登山隊のスポンサーになっている年代の人達には［日中友好］を旗印に掲げ、登山やトレッキング、同行した観光によって中国にお金を落とすことによって少しでも過去に犯した過ちを償いたいという気持ちを感じる。

このような背景を抱えた登山隊の多くは、一過

開放後に登頂された主な山

※印は初登頂、その他は開放後初めて登頂

１９８０年
チョモランマ（8,848m）日本
シシャパンマ（8,027m）ドイツ
ムスターグ・アタ（7,546m）アメリカ
１９８１年
＊コングール（7,719m）イギリス
コングール・チュビエ（7,530m）日本
＊モラメンチン（7,703m）ニュージランド
＊ムスターグ・アタN（7,184m）日本
＊スークーニャン（6,250m）日本
＊アムネマチン（6,282m）日本
＊ボゴダ（5,445m）日本
１９８２年
チョゴリ（8,611m）日本
ミニヤ・コンカ（7,556m）アメリカ
＊チャンツェ（7,553m）ドイツ
＊ポーロン・リ（7,292m）日本
＊カンペンチン（7,281m）日本
１９８３年
＊ナイプン（7,043m）中国
冬期チョモランマ北壁8,100mまで
１９８５年
チョー・オユー（8,201m）中国
＊ナムナニ（7,694m）中国／日本
＊ウルグ・ムスターグ（6,973m）中国／米国
＊グラタンドン（6,621m）日本
キレン（5,547m）日本
冬期チョモランマ北壁8,450mまで
１９８６年
＊クーラ・カンリ（7,538m）日本
＊チョー・アウイ（7,354m）日本
＊ギャラ・ペリ（7,294m）日本
＊カルジャン（7,216m）日本
＊ニンチンカンサ（7,191m）中国
＊Pk.7,167m　日本
＊ニェンチェンタンラ（7,162m）日本
＊シュエバオ・ディン（5,588m）中国／日本

１９８７年
＊プンパ・リ（7,447m）イギリス
＊ラプチェ・カン（7,367m）中国／日本
＊エポンジャロ・リ（7,300m）国際隊
＊ユイロン（5,596m）アメリカ
冬期チョモランマ北東クーロワール7,650mまで
１９８８年
＊カント（7,060m）日本
＊メンルンツェW（7,023m）イギリス
＊Pk.6,903m　日本
＊チャクラギール（6,678m）日本
＊ゲニ（6,204m）日本
＊チェルー（6,168m）中国／日本
冬期チョモランマ北東クーロワール7,800mまで
１９８９年
＊スークァン・リ（7,308m）日本
＊ニャナン・リ（7,071m）ユーゴ
＊チョルパンリク・ムスターグ（6,524m）日本
＊アルチン（5,798m）中国／日本
１９９０年
＊ムーシュ・ムスターグ（6,638m）日本
＊シュエレン（6,627m）日本
＊ザルセル・カンリ（6,460m）中国／日本
１９９１年
＊ヤンゴンシャン（5,273m）日本
１９９２年
ブロード・ピークC（8,011m）国際隊
＊ナムチャ・バルワ（7,782m）中国／日本
＊メンルンツェ（7,181m）スロヴェニア
＊シンチン（6,860m）日本
＊サンディンカンシャ（6,590m）日本
１９９３年
チョモ・レンゾ（7,816m）日本
＊クラウン（7,295m）日本
１９９４年
＊チリン（7,090m）日本
＊カシカール（6,342m）日本

※冬期チョモランマの４隊は全て登頂していないが参考として入れた。

性の面を持っているので、登山費用の面でも多少甘くなり勝ちである。そのことが、中国側に与える影響は少くないと言えよう。

■日本隊によるユニークな活動

1）長野県山岳協会の合同研修

1980年秋、喬加欽団長ら中国登山協会の代表団が、春のチョモランマ登山に成功した日本山岳会らの招きによって訪日した。この時、長野県山岳協会は、［日中合同登山技術研修会］の開催を提案した。以後日中の協議の末、日本側の組織としては日本山岳協会が主催し、長野県山岳協会が主管し10年間継続することで合意した。

研修は、両国で交互に開催された。1981年4月には王振華を団長とする9人が来日し、合同研修の第1回目がスタートした。研修は八方尾根、中央アルプス、八ヶ岳、穂高岳などを舞台に行われ、来日した中国側の9人全員が、当時の日本山岳協会第2種指導員検定を受け全員が合格した。翌82年の第2回目は、日本の武田武を団長とする15人が訪中し、新疆のボゴダ峰で行われた。（天山友誼P115〜116）以後交互に訪問し合って研修が続けられ、登山交流として多大なる成果を上げたのである。

また、長野県山岳協会は、中国登山界の岩登り技術向上のために建設された、北京郊外にある人工岩場の推進にも多大なる協力をしている。

そして、西蔵登山協会と姉妹協定を結ぶなど、中国登山では異彩を放っているのである。

2）若手の養成を計った日本山岳会

1980年春に、チョモランマ登頂に成功した日本山岳会は、有志の発案により学生を中心とした若い会員の育成のために、新疆のボゴダ山群の許可を1981年から5年間継続して取得した。（山岳第七十七年・P74）

この山群では、1981年から84年までの4年間でⅠ峰主峰の登頂、Ⅱ峰初登頂、Ⅰ峰西峰〜中央峰（初登頂）〜南峰縦走などの成果を上げた。

ボゴダ山群での活動は84年に終了し、85年には会の創立80周年に合わせて、キレンとユイチュ（当時はカカサイジモンカ）登山隊が組織された。この計画にはボゴダの思想が引き継がれ、若手を

▼1983年開催の中国登山研究会

中心として実施された。（日本山岳会中国登山隊1985報告書・P1）

3）HAJの活躍

手前味噌になるかも知れないが、我がHAJの活動も中国登山ではユニークな部類に入るだろう。

HAJが中国の山に向かったのは1983年である。それ以来1994年までの12年間連続途切れることなく登山、踏査、探検隊を送り続けた。その数は40隊総勢323名。40隊のうちには、2つの女性合同登山隊（1985年新疆ムーシュ・ムスターグ、94年青海ユイシュ）と2つの合同登山隊（86年四川シュエ・バオディン、87年西蔵ラプチェ・カン）が含まれている。

その結果、七千メートル峰4座、六千メートル峰2座、五千メートル峰2座に初登頂することができた。しかし、2座で5名を雪崩で失ったことは深く反省しなければならない。

その他1983年秋には2人を、84年春にナムチャ・バルワに向かう中国隊の岩登り技術指導のために派遣した。

また、日本国内の中国登山の理解を深めるために、83年夏中国登山協会、86年春四川省登山協会、秋西蔵登山協会からそれぞれ代表団を招請して［中国登山研究会］を開催し、国内の中国登山愛好者に公開した。

これら合同登山、研究会、渉外のための度重なる訪中など、親善、登山交流活動を通して得られた情報やノウハウは、一冊の本に纏められ［中国登山の手引き］として発行されて、中国登山を目指す多くの岳人から好評を博しているのである。

中国高峰分布図

カザフ共和国
モンゴル共和国
キルギス共和国
パキスタン
インド
ネパール
ブータン
ミャンマー
ハン・テンリ 6,995m
シュエレン 6,627m
トムール 7,435m
カシカール 6,342m
ウルムチ
ボゴダ 5,445m
コングール 7,719m
コングール・チュビエ 7,530m
ムスターグ・アタ 7,546m
クラウン 7,295m
チリン 7,095m
チョゴリ 8,611m
ブロード・ピーク 8,047m
ガッシャーブルムⅠ 8,068m
Ⅱ 8,035m
ムーシュ・ムスターグ 6,638m
クディ・クリック 6,488
7,167m
6,903m
6,973m
ウルグ・ムスターグ
新疆ウイグル自治区
甘粛州
内蒙古自治区
アルチン 5,798m
キレン 5,547m
青海省
青海湖
シンチン 6,860m
5,933m
6,179m
ユイシュ
ユイチュ
ヤラダ・ツォ 5,214m
西宁
蘭州
アムネ・マチン 6,282m
パヤンカラ 5,267m
6,621m グラタンドン
ザルセル・カンリ 6,460m
西蔵自治区
カン・リンポチェ 6,638m
ナムナニ 7,694m
ルンポ・カンリ 7,095m
カロ 5,369m
シュエバオ・ディン 5,588m
チェルー 6,168m
ヤンゴシャン 5,527m
6,250m
スークーニャン
成都
四川省
ニェンチェンタンラ 7,162m
ラトナ・チュリ 7,035m
チョブカン 7,048m
ラサ
シシャパンマ 8,027m
8,848m
チョモランマ
ニンチンカンサ 7,191m
ギャラ・ペリ 7,294
ナムチャ・バルワ 7,782m
6,060m
6,204m
6,740m
ミニヤ・コンカ 7,556m
ゲニ
メイリ・シュエシャン
シャラリ 6,034m
ユイロン 5,596
カンペンチン 7,281m
ポーロン・リ 7,292m
ランタン・リ 7,205m
ローツェ 8,516m
マカルー 8,463m
インド
チョモラーリ 7,364m
ジョサン・ピーク 7,483m
チョー・オユー 8,201m
ラプチェ・カン 7,367m
チョー・アウイ 7,354m
スークァン・リ 7,304m
メンルンツェ 7,181m
ツェリンマ 7,134m
トゥイ・カンリ 6,990m
カント 7,060m
5,881m
カカルボラジ
クーラ・カンリ 7,538m
カルジャン 7,216m
ガシケルプンスム 7,540m
雲南省
昆明

■ 寸 感 ■

「岩と雪」が休刊するらしい。休刊の理由は定かでないが、誠に残念な事である。「岩と雪」は日本のみならず、世界の「IWA TO YUKI」でもあった。この休刊の報に接してアダムス・カーター、ハリシュ・カパディア、ジョセフ・ニェイカ、スディール・サヒ……などの編集長達も皆残念がっている事だろう。否、編集長のみならずそれらを読む世界中の岳人が残念がっている事だろう。

日本の雑誌が世界中で評価を受けるのは稀有と云う。その素晴らしい文化の輝きが消えるのはたまらなく寂しい。ほんとうにこの光を消してしまって良いのだろうか……

事務局日誌（2月）

6日（月）　釧路地方法務局からミニヤ・コンカの件で照会あり。
8日（水）　ＪＡＣマカルー壮行会（遠藤、山森）
10日（金）　ＪＡＣ山口理事ら来会し、情報管理の件で意見交換。
ヒマラヤ№280発送
13日（月）　インド、シカール社クマール氏来会
15日（水）　プラブーツ懇談会（山森、中川）
キンヤン・キッシュ打合せ
18日～19日　ヌン隊合宿（於ルーム）
日山協海外登山研究会（尾形、中川）
25日（土）　ＪＡＣ青年登山懇談会（山森）
27日（月）　東京集会（25名）

ヒマラヤ №281（4月号）

平成7年3月10日印刷　7年4月1日発行
発行人　稲田定重
編集人　尾形好雄
発行所　日本ヒマラヤ協会
〒170　東京都豊島区東池袋4－2－7
萬栄ビル501号
電話　03-3988-8474
郵便振替　00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始！

加圧しただけで約２０００ｍ下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ／総重量6.7kg)
●パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置／重量380ｇ／単３乾電池４本使用／携帯型)

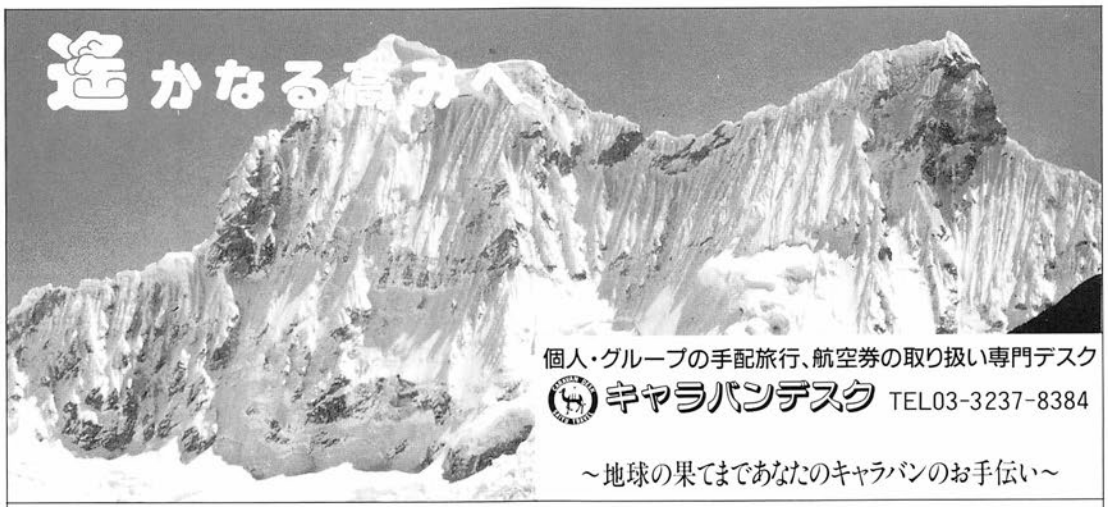
総代理店　：　日本メディコ株式会社
レンタル・販売問い合わせ先　：　株式会社 ティ・エッチ・アイ
〒135　東京都江東区木場2-5-7　KHビル7階
ＴＥＬ：03-5245-0511　ＦＡＸ：03-5245-0510
(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

——遠征隊、トレッキング、秘境への旅——
あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。

マウンテントラベル株式会社 ☎03-3574-8880
〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F
三井航空サービス代理店2452号



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク
キャラバンデスク TEL03-3237-8384
～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア

株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル5階 ☎03(3237)1391(代表)
キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル4階 ☎03(3237)8384(代表)
大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)
カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU. NEPAL ☎221707
運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。

Mt. EXPEDITION SHOP

ICI ISHII SPORTS

●登山本店／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601㈹
● スキー&カヌー本店／〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547㈹
●新宿西口店／〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301㈹
●新宿南口店／〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
●神田登山店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
●神田店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
●神田ウェアー館／〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
●八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
●アネックス八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
●川越店／〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
●大宮店／〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
●高崎店／〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
●松本店／〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
●新潟店／〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330
●新潟プラーカ店／〒950 新潟県新潟市天神1-1 プラーカ3 B1 ☎025(240)2316
●仙台店／〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
●盛岡大通店／〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
●札幌店／〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
●ルート36真栄店／〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
●北十二条店／〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
●2番街店／〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
●旭川店／〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
●外商部(メイルオーダー)／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219

ICI石井スポーツ

事務所／〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004